



発行所
公益社団法人 国民文化研究会
(九州←東京←全国)
東京都渋谷区東1-13-1-402
振替 00170-1-60507
電話 03-5468-6230
FAX 03-5468-1470
http://www.kokubunken.or.jp/
E-mail: info@kokubunken.or.jp
月刊「国民同胞」編集部
毎月一回10日発行
購読料 年間2000円

何から何を守るのか

— 国防問題と日本の急務 —

理事長 小柳志乃夫

昨年暮れに発表された防衛力の抜本的強化に向けた三文書の一つである「国家安全保障戦略」以下、「戦略」と略記)に改めて目を通してみた。軍事膨張した中国を中心とする対外的な危機や安全保障環境の複雑化などの認識とともに、わが国の課題や守るべき国益も網羅されてゐる。ただ、そこには国民として国防問題にどう立ち向かふかといふ点は書かれてゐない。「国家としての力の発揮は国民の決意から始まる」との新たな一文があるが、どんな決意が求められるのかは示されてゐない。現憲法下では「自分の国は自分で守るといふ国民の決意」とは書きがたいのだらうか。ウクライナ戦の報道を見てきた所為か、その点ではもどかしい印象をもった。

筆者の亡き親友の山根清兄(防衛施設庁勤務)は、生前、防衛大の学生との勉強会を主宰してゐ

た。彼はよく「何から何を守るのか」といふ問ひを發して、学生に国防の原点を考へさせてゐた。勉強会のテキストは岡村誠之氏による「組織を生かす―体験的軍人勅諭論」であった。岡村氏は明治三十七年のお生れで大本營參謀や陸軍大学校の兵學教官であつた方である。そこには、国防問題に対して国民がもつべき基本的な認識が示されてゐると思ふので、一部を摘記してみる。

・国防とは、現代に生きるわれわれが、祖先から承けついで国家を子孫に申し継ぐために現代において守り通すことである。―この一節には、今回の「戦略」が明示してゐない、悠久の生命体としての祖国日本の姿がある。その命を守るのが国防である。

・祖先に対する感恩の情と子孫に対する愛情に基づく義務感こそが国防の精神的基礎である。―大

東亜戦争に命を捧げられた英靈の遺書にも、天皇陛下万歳の言葉とともに、父母への感謝や妻子への深い愛情、そして万葉の防人の心に通ずる歌がある。勇敢敢闘の精神はそこから生まれた。功利的な考へ方からは生まれはしない。今回の「戦略」にも「社会的基盤の強化」の項の中に「我が国と郷土を愛する心を養ふ」との一文があり、国防意識の上で何より肝要だと思ふ。この点、戦死者の慰霊と祖国防衛の意志は深く繋がつてゐて、靖国神社参拝はこの要に位置する。本来、首相の靖国神社参拝は国防の第一歩といふべきものだらう。

・《戦いの本質は、相手の心を己れに従わせることにあるから、敵側を殺傷してそれに導くことを主とする西洋式の兵術よりも、直接相手側の心に働きかけることに力点をおく東洋の兵術の方が、兵法の主流である。武力戦が間接侵略方式であり、思想心理戦こそが直接侵略方式である。―日本は敗戦後の被占領期に、二度と米国の脅威にならぬやうにと、皇室制度を初めとして憲法から民法や教育制度に至るまで万般を民主化の名の下に改変されるといふ思想心理戦(直接侵略)に曝された。独立後も憲法は変らず、さらに近隣諸国からの歴史戦教科書検定、総理の靖国神社

参拝、「慰安婦」問題などといふ新たな思想心理戦を挑まれてきた。後者は国内の左派勢力や偏向メディアが火をつけて、海外で増幅されたものであつた。

岡村氏は思想心理戦に関して、執筆時(昭和四十年代)の情勢を踏まへて「国民的統一が壊れつつある事実、すなわち守るべき対象を失いつつある事実こそが、正に国防の危機である」と指摘してゐるが、わが国においては、皇室の御存在がこの国民的統一の求心力として、戦後も一貫して働いてきた。

安倍元総理の一周忌の七月八日、にその志を継承する集ひが都内で開かれた。安倍総理のスピーチライターを務めた谷口智彦氏も登壇した。氏は安倍総理の男系による皇統維持についての秘話を紹介した上で、「皇統は日本の脊髄である。近代的理念では推し量れないもので、世界にないものである。習近平主席はこの脊髄を外しかかるだらう。女系で何が悪いかと持ち出すかもしれない。いや、既にその方向への密かな世論誘導が始まつてゐるとみるべきだ」と述べた。日本の中核に対する思想心理戦が始まつてゐるのである。国民の決意。―よつて国民的統一の根源たる皇統を護持すべき局面である。早期の旧宮家復活による皇位継承の安定を切望する。